

第8回 意味上の主語

(1)

【例文】

1. It is necessary for us to be polite to others. (162)
2. It is crazy of you to let such a young girl drive your car. (163)
3. The secret of success in life is for a man to be ready for his opportunity when it comes.
4. Here is a new book for you to read. (380)
5. He stood aside for her to enter. (382)
6. He was anxious for his sister to get married.

【語彙とポイント】

a year before (486)

a year <before Queen Victoria came to the throne> a yearは名詞であるが、副詞として機能している。by a yearのbyの省略と解する。「ヴィクトリア女王が王座に就く一年前」
a year before … 「…の一年前」などと覚えようとしてはいけないことはいつもの通り。
before S+V, で、「sがvする以前」というあなたもご存じの副詞節があるだけである。

the first …… to—(374) the 序数 名詞 to 不定詞＝「to不定詞する○番目の名詞」
と機械的におぼえるのではなくて、to不定詞の機能は、名詞的用法、形容詞的用法、副詞的用法のいずれか？そもそも、ここで不定詞句がなければ、どうなる？と考える。「最初の○○」というような、最初とか最後という考え方の枠組みは、「比較」である。だから、基準が必要になるのである。その基準がto不定詞以下で示されているのである。「to不定詞する最初の…」というように、序数を説明しているのであるから、序数が形容詞、それを規定しているのでto不定詞句は副詞的用法である。その後は、《V'→O',S'》で意味を決めて行く。

qualify 自動詞 資格を得る as/for

他動詞 資格を与える (受け身で) 資格を認められる

the greater part (567) 『絶対比較級：比較の対象が明確な比較級を相対比較級といい、大部分の比較級はこれに属するが、それに対して比較の対象がはっきりせず、あるも

のを漠然と2つに分けて、そのうちの程度の高い方を示す比較級を絶対比較級という』

（総解英文法 高梨健吉 美誠社 P313）とある。

勉強の方法として、最もいけないのは、このような抜き書きを集めた得体の知れない予備校のテキストを覚えて行こうとすること、（2）次にいけないのは、こういう文法書の記述を覚えようとする事です。

よろしいのは、[1]（1）比較級➡何と何を、（この文の場合her life）、（2）どのような基準で、「大きい、小さい（greater、shorter）」なので、人生を2つに分けた場合のより大きい部分と、より小さい部分のうちの大きい方ということ、と知ることであり、その上で、[2] このように比較が陰伏的である場合の用法について何か解説はないかな、と考えて文法書を開いて、上の記述を読んで、「なるほど」と理解納得した上で、「絶対比較」というような言葉は忘れてしまうことである。そういうことよりは、比較の基本に則って処理すれば、自然に理解できるのだな。ということこそ、覚えておかなくてはならないことでしょうか？覚えるのは、原則では処理できない事象だけで十分だと思います。

come of He comes of a wealthy family. of 出自

except for …を除いては、except との使い方の差を理解しておく必要がある。

every,all,any,no,whole,each+名詞をexcept(for)が修飾する、あるいは、neverまたは否定文を修飾する場合、except、except forのいずれもが使える。

文頭に来る場合、except for のみ。被修飾語が上記のような不特定な名詞ではない（特定の事柄の）場合except forのみ。

Except forのforは前置詞なので、前置詞句や節が来る場合exceptのみが使える。

open to School is open to all. 学校（教育）は全ての人に開かれている。

governess （住み込みの）女性家庭教師

miserable みじめな

take up

【例題】

Elizabeth Garrett Anderson was born in London on 9 June 1836, a year before Queen Victoria came to the throne. In those days there was very little opportunity for a woman to follow a profession with much chance of success. Elizabeth, however, made her own opportunity; she was the first woman to qualify as a doctor in England, and only the second in the world. She devoted the greater part of her life to establishing medicine as a career for women generally.

When Elizabeth Garrett was young it was not considered proper for a woman, unless she came of a poor family, to work for her living. Florence Nightingale did her best to attract girls of all classes into the nursing profession. Except for nursing, the only job then open to a girl from a good home was that of a family governess, for which she was probably paid the miserable wage of about twenty, five pounds a year. She could not even take up secretarial work, for in those days no one would have considered employing a woman secretary.

【テーマ】最初に医師になった女性について

【和訳】エリザベス・ギャレット・アンダーソンは、1836年6月9日、ヴィクトリア女王が王座に就く一年前に、ロンドンで生まれた。その頃、女性にとって成功のチャンスが多く伴う職業に従事するための機会は本当にほとんどなかった。エリザベスは、しかしながら、自分自身の機会を作った。つまり、彼女は、イングランドで最初に医師としての資格を得た最初の女性だったし、世界でも第2番目にすぎなかった。彼女は、自分の人生のより多くの部分を医学を女性のための仕事として一般的に確立することに捧げた。

エリザベス・ギャレットが若い時、女性にとって、彼女が貧しい家の出身でない場合、生活のために働くことは適切であると考えられていなかった。フローレンス・ナイチンゲールは、全ての階級の少女を看護職へと惹きつけるために最善を尽くした。看護をすることを除いては、良い家の出身の少女に、その当時、開かれていた唯一の職業は、住み込みの女性家庭教師というそれであり、そのために彼女は一年に約25ポンドという惨めな賃金を恐らくは支払われた。彼女は秘書の仕事さえも得ることはできなかった。というのも、当時は、女性を秘書に雇おうと考える人は誰もいなかったからだ。